

# やすらぎ通信

平成 30 年 お盆

発刊不定期 横浜やすらぎの郷霊園管理事務所 〒241-0802 神奈川県横浜市旭区上川井町 1749-1  
☎045-924-0210 FAX:045-924-0239 URL: [y-yasuraginosato.jp](http://y-yasuraginosato.jp) Eメール: [info@y-yasuraginosato.jp](mailto:info@y-yasuraginosato.jp)

## ～ やすらぎの夏 お墓参りの夏 ～

### ◇『ハスの花、ハンパないって!!』

やすらぎの郷では昨年よりハスの栽培を始めました。左の写真は昨年のハスの花です。



大きな葉っぱの間からつぼみがスーッと立ち上がり日に日に膨みやがて花が開きます。ハスの花は早朝に開き、昼ごろにはもう閉じてしまいます。数日の間、開いたり閉じたりを繰り返しやがて花びらが散って花托(かたく)が残ります。



花が開いた時の幻想的な美しさはまさに「半端ないって!!」

『でいちゆう れんげ泥中の蓮華』という禅語があります。

蓮華(ハスの花)は泥(どろ)の中にあって、はじめてきれいな花を咲かせます。キレイな水ではなく、泥なくしては決して美しい花は咲かない。転じて、思い通りにならないで苦しむこの世の中だからこそ清らかな花、人として素晴らしい心の花を咲かせることができるのだとの教えです。

ハスの花を観ると元気をもらった気がしてきます。

そんなハスですが、実は今年はまだ咲いていません。

7月後半には咲くと思いますが、今はまだ花芽が立ち上がってきません。代わりに水面に何か白い花が……。よく見るとメダカの隠れ家として入れた水草が花を咲かせていました。びっくりしましたが、これはこれで可愛いので見に来て下さいね。



### ◇やすらぎの涼

昨夏、暑い中お墓参りにこられた方々に少しでも涼を感じてもらおうと特製のミストを設置しました。ミストというと格好がよいですが、散水ホースを上に向けて噴射しているだけのものです。こんな簡易的なものでも好評でしたので、今年もやりたいと思います。子どもたちにも大人気。小鳥も水浴びにやってきます。虹もかかります。やすらぎの郷は井戸水を使用しているので水道代はかかりませんからご安心下さい。

又、恒例のゴーヤのグリーンカーテンも設置しています。今年もいっぱい収穫できるかな？



## ◆お盆行事

世の中は様々な技術の革新によって日々、目まぐるしく変化をしています。それでも今も昔と変わらずにお盆行事はお正月と同様に大切な行事として引き継がれています。毎年お盆の頃のニュースでは、家族そろっての帰省やお墓参りの姿が映し出されます。渋滞にめげずに故郷に帰りたと思う気持ち。これは家族、親族が顔を合わせてお互いの近況を確かめ合うひと時を過ごしたい、というだけでなく、ふだんおろそかにしがちなご先祖さまに手を合わせたいという思いからもくるのでしょう。やすらぎの郷霊園でもお盆の時期には汗を拭きながらたくさんの方がお墓参りをされます。お墓参りをすると何故だか気持ちがすっきりしているものですよね。



お盆行事のことを盂蘭盆うらぼんといいますが、この盂蘭盆が文献にあらわれるのは、奈良時代の 606 年（推古 14 年）のことで、『日本書紀』の中には「この年より初めて寺ごとに 4 月 8 日、7 月 15 日に設齋せしめき」という記述が見られます。すなわち 4 月 8 日の仏生会（降誕会）と並んで宮中における恒例行事であると設齋として行われ、平安時代中期頃から次第に貴族社会で盛んになり、鎌倉時代には武家の万灯会まんとうえや施食会せじきえ（施餓鬼会せがきえ）が修行され、室町時代初めには念仏踊り、江戸時代になると精霊の迎え火や送り火などが民間に広まったとされます。

お盆の語源は古代インドのことばであるサンスクリット語の「ウラバンナ (Ullambana)」が漢字に音写された「盂蘭盆」の略語とする説が一般的です。もとは「アヴァランバナ (avambana)」の転訛てんかで、逆さにつるされている（倒懸とうけん）という意味ですが、イランでは死者の靈魂を「ウルヴァン (urvan)」と呼ぶことから、イラン語起源説を唱える学者もいます。

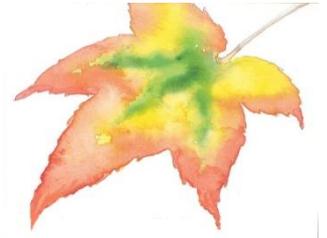
インドの気候はおおむね乾期と雨季とがあり、雨季の 3 ヶ月間は毎日のように雨が降り続きます。仏弟子たちは、お釈迦さまの教えにしたがい伝道の旅をしていましたが、この雨季には 1 ヶ所に集り、静かに坐禅修行の日々を送ります。この修行を「雨安居うあんご」といいます。雨季が終わるころの 7 月 15 日にはお釈迦さまのもとに弟子たちが相集い、この期間中の自分自身の行いを振り返り、「自恣じし」という自らの過ちをお互いに懺悔さんげする集いを持ちました。お釈迦さまは、この雨安居を終えた自恣の日こそ、僧侶たちにまごころを込めて飲食の供養をするよう勧められたのです。そして後世、日本においてこうした仏教の教えと民族宗教が習合し、先祖崇拝や死者供養としての「お盆」という習俗が誕生したといわれます。（曹洞宗宗務庁 梅花流指導必携より）

古くから伝わるお盆行事を通して私たちは何を学ぶことができるのでしょうか。そのヒントになるかも知れない本をご紹介します。

ご存知の方もいると思います『葉っぱのフレディーいのちの旅』という童話です。春に生まれた葉っぱのフレディが、夏を生き生きと暮らし、秋には紅葉し、やがて冬に散って土に帰るまでの一生の物語です。冬を迎えることを恐れるフレディに対して静かに諭す兄貴分の葉っぱ、ダニエルとの会話が印象的です。（以下、「葉っぱのフレディーいのちの旅」レオ・バスカーリア作 みらい なな訳 島田光雄画 童話屋）より）



風が変わったのはそのあとでした。夏の間 笑いながらいっしょに踊ってくれた風が別人のように、顔をこわばらせて葉っぱたちにおそいかかってきたのです。葉っぱたちはこらえきれずに吹きとばされ、まき上げられ、つぎつぎと落ちていきました。



「さむいよう」「こわいよう」葉っぱたちはおびえました。そこへ風のうなり声の中から、ダニエルの声がとぎれとぎれに聞こえてきました。「みんな引っ越しをする時がきたんだよ。とうとう冬が来たんだ。ぼくたちはひとり残らずここからいなくなるんだ」フレディは悲しくなりました。ここはフレディにとって、居心地のよい夢のような場所だったからです。「ぼくもここからいなくなるの?」「そうだよ。ぼくたちは葉っぱに生まれて葉っぱの仕事を全部やった。太陽や月から光をもらい雨や風にはげまされて、木のためにも他人(ひと)のためにもりっぱに役割をはたしたのさ。だから引っ越しのだよ」とダニエルは答えました。「ダニエル、きみも引っ越しの?」とフレディはたずねました。「ぼくも引っ越しよ」「それはいつ?」「ぼくのぼんが来たらね」「ぼくはいやだ!ぼくはここにいるよ!」フレディは大声で叫びました。(友達の)アルフレッドもベンもクレアもその時が来て、引っ越ししていきました。見ていると風に逆らって枝にしがみつく葉もあるし、あっさりはなれる葉っぱもあります。やがて木は葉を落として裸どうぜんになりました。残っているのはフレディとダニエルだけです。

「引っ越しをするとか、ここからいなくなるとかきみは言っていたけれどそれは!」とフレディは胸がいっぱいになりました。「死ぬ ということでしょう?」ダニエルは口をかたくむすんでいます。「ぼくは死ぬのがこわいよ」とフレディが言いました。「そのとおりだね」とダニエルが答えました。「まだ経験したことがないことは、こわいと思うものだ。でも考えてごらん。世界は変化し続けているんだ。変化しないものは、ひとつもないんだよ。春が来て夏になり秋になる。葉っぱは緑から紅葉して散る。変化するって自然なことなんだ。きみは春が夏になるとき、こわかったかい?緑から紅葉するとき、こわくなかったろう?僕たちも変化し続けているんだ。死ぬというもの、変わることをひとつなのだよ」変化するって自然なことだと聞いて、フレディは少し安心しました。枝にはもうダニエルしか残っていません。「この木も死ぬの?」「いつかは死ぬさ。でもいのちは永遠に生きているのだよ」とダニエルは答えました。葉っぱも死ぬ、木も死ぬ。そうすると、春に生まれて冬に死んでしまうフレディの一生には、どういう意味があるのでしょうか。「ねえダニエル。ぼくは生まれてきてよかったのだろうか」とフレディはたずねました。



ダニエルは深くうなずきました。「ぼくらは春から冬までの間、本当によく働いたしよく遊んだね。まわりには月や太陽や星がいた。雨や風もいた。人間に木かげを作ったり、秋には鮮やかに紅葉してみんなの目を楽しませたりもしたよね。それはどんなに楽しかったことだろう。それはどんなに幸せだったことだろう。」



その日の夕暮れ、金色の光の中をダニエルは枝を離れていきました。「さようならフレディ」ダニエルは満足そうなほほえみを浮かべ、ゆっくり静かにいなくなりました。フレディはひとりになりました。次の朝は雪でした。初雪です。(中略)明け方フレディは迎えに来た風によって枝をはなれました。痛くもなくこわくもあ

りませんでした。フレディは空中にしばらく舞ってそれからそっと地面におりていきました。そのときはじめてフレディは木の全体の姿を見ました。なんてがっしりした、たくましい木なのでしょう。これならいつまでも生きつづけるにちがいありません。フレディは



ダニエルから聞いた“いのち”ということばを思い出しました。

“いのち”というのは永遠に生きているのだということでした。

フレディは知らなかったのですが……。

冬が終わると春が来て、雪はとけ水になり、枯葉のフレディはその水にまじり、土に溶けこんで、木を育てる力になるのです。フレディは生まれたところにかえったのでした。

“いのち”は土や根や木の中の、目には見えないところで、新しい葉っぱを生みだそうと準備をしています。大自然の設計図は、寸分の狂いもなく“いのち”を変化させ続けているのです。また春がめぐってきました。

私たちにつながる無数の“いのち”。その“いのち”を感じるお盆行事。そして今生きている私たちの命も無限につながっていく“いのち”。過去から現在、未来へ向かう“いのち”の流れの中で存在する私たちは一体何を受け止め、何を行じ、また何を伝えていくのでしょうか。

永遠に生きる“いのち”の中で生きている私たち。どうぞ、よいお盆をお迎え下さい。 合掌

### ◇◇お知らせ◇◇

#### ◆お盆期間のご供養について

お盆期間（7月13日～16日、8月13日～16日）は他宗派寺院の依頼受付は承れません。善光寺のみの受付とさせて頂いております。墓前やご自宅でのご供養、塔婆のみのご供養なども承ります。詳しくは管理事務所までご相談下さい。

#### ◆各種催事のご案内

善光寺では坐禅会や写経会などの他にも論語のお話、華道教室、御詠歌教室など幅ひろく催事を執り行っております。坐禅会は企業や学校などの団体でのお申込みも承っております。

詳しくは善光寺（港南区日野中央1-12-9 TEL045-845-1371）へお問合せ下さい。

やすらぎの郷霊園でもイス坐禅や法話会をおこなっています。お気軽にお問合せ下さい。

**編集後記** ■昨年7月に105歳で亡くなられた日野原重明先生は「葉っぱのフレディーいのちの旅」に感銘を受け自らミュージカルを企画・舞台化し、2000年より上演を続けてこられました。「いのちとは何か、いかに生きるか」を全ての世代に問い続け、ご自身は生涯現役の医師として自らの生き方をもって示してこられた方でした。

■「母の日参り」という言葉をご存知ですか？ 5月第2日曜日の「母の日」はお母さんを偲ぶ想いから始まったと言われ、「大人にも母が恋しい季（とき）があります」とのキャッチコピーでお線香の日本香堂が大々的に「母の日参り」を推奨していました。「母の日」といえば「父の日」も忘れてはいけませんね。優しいイメージのある母と異なり厳しいイメージのある父です。損な役回りなののでしょうか、「父の日参り」の言葉はあまり耳にしませんね。それでも「父の日」にもたくさんの方がお墓参りに来られました。「叱られた恩を忘れず墓参り……」

■今回のやすらぎ通信で50号目の発刊となりました。皆さまのおかげで回を重ねることができましたこと心より感謝申し上げます。これからも各種のお知らせをはじめ、やすらぎを感じて頂けるような紙面を目指して参ります。ご意見、ご感想等お気軽にお寄せ下さい。

